

鍵盤に魔法を

調律師 鈴木均が語る

かばんの中の調律道具を数えてみたら150種類くらいありました。数年に1回しか使わないものも。重い、と取り除いた途端に必要な場面に遭遇し、再び戻すの繰り返しです。専門店で入手できるものが基本ですが、自分で工夫して作った道具が多くなりました。旋盤、フライス盤などの工作機械も自宅にあります。

際どい要求に応えるため、音のイメージがはっきりしてくると、コンサートのための調律は市販品だけではできなくなります。

ピアノは鍵盤を押すと、内部のアクションが連動してハンマーが動き、張ってある弦を打つことによって音が出ます。弦は両端がピンで留められていて鍵盤か



チューニングピンを締めたり緩めたりし、勘所で止める＝愛知県岡崎市シンビックセンターで

弦に仕掛ける「揺るぎ」

150種類の道具

ら見て奥側のピンの手前にある駒が、縄跳びの縄のように上下する弦の振動を共鳴板に伝え、それが拡大されてピアノらしい音に聞こえます。

調律はまず、鍵盤側のチューニングピンを締めたり緩めたりして音程を調整します。手に持つチューニングハンマーに伝わる感触を頼りに、ここぞという勘所で止める。弦の両端のピン、その間にある駒と駒が引張っている4カ所の力が均等になつていれば、多少強く弾いても音程は崩れません。アナログな作業です。

経験の浅い調律師が手前側だけの張力を意識すると、協奏曲でバーンと強く弾かれた時、張力が移動して音程が狂ってしまう。狂ってはいけないと、鍵盤を強くたたいて調律すると、音色が硬くなり表現の幅が狭くなってしまいます。

ベテランは和音の響き、音の伸びを意識します。そしてリハーサルの際にピアノニストの打鍵で微妙に弦がずれ、曲に合った響きに変化させる仕掛け。これが「揺るぎ」の工夫です。超絶技巧のピアノニストは注文が多いと思われがちですが、意外なくらいノーマルな調整でOKが出ます。楽器の状態に左右されるようでは、世界を股に掛けた演奏はできないのです。

今回は、そんな超絶技巧のピアノニストを担当した経験をお話します。

(聞き手・南拡大朗)